

## ディスクールと解釈

久 米 博

### 1. 言語の現象学と構造主義

ことばは何よりもまず声である。声としてのことばは時間の中に生き、瞬間に生まれ、瞬間に消える。声は単に分節化した音ではない。ルイ・ラヴェルは声を「純粹音」になぞらえた。それは純粹に意味を伝えて消える点<sup>(1)</sup>であり、肉であると同時に思想である。

ことばは、しかし物神化されてはならない。言語は本来、それ自体が目的でなく、媒体である。言語はそれが目的とする、指示・表現・伝達の機能を果たすや、ただちに消えさるべきもの、それが達成する行為の中に吸収されるべきものである。

「神は『光あれ』と言われた。すると光があった。」

この創世記冒頭の一節に、ことばの原像をみることができる。

とはいえここにおいて、現代ではすでに、言語と事物の、言語と行為の、幸福にして完璧な一致は失われてしまったとして、いたずらに慨嘆すべきであろうか。私たちは複雑多様な現実の相を前にすると、いわゆる「原点に溯って」、原初の単純で純粹な状態を好んで想定し、その単純状態に還元してみたい。かつて人類の幼児期に存在したものが、現在では墮落し、あるいは失われてしまった、

と。だが、失われた「原」への郷愁というのは、一種の神話的思考に染まっているのではないだろうか。かえって、ことばと事物の間のずれこそ、言語の本質であり、現実であるとして、そこから出発すべきである。

ことばは行為の中に死滅し、そして常に新たに、行為として蘇える。言語は一方で、記号体系として制度化されており、他方では、個人の言語行為のうちに、限りなく創造されている。このように、あらゆる矛盾や対立を胎んだ生きものが言語であるなら、現実の錯雑した言語現象のうちに、言語を生きたものとして捉えるよう試みなければならない。

従来、言語を分析するにあたって、主として<sup>ディクショナリー</sup>二分法による、いろいろな区分、分類、階層化がなされてきた。たとえば、le signifiant と le signifié, expression と contenu, dénotation, と connotation など。何よりも、言語を論じ、扱うには言語をもってしなければならないところに、言語論の重要な特質がある以上、2次言語とかメタ言語などの、言語の類別化は必要である。このように言語の解析を続けていきながら、他方では、たえず語る主体に、語る人間に立ちもどらねばならない。今日、言語はあらゆる人間の問題の根底をなしているが、それゆえにこそ、言語問題の解明は、言語学のみをもってしては限界があり、むしろいろいろな人間科学からのア

ブローチを必要としているのである。

言語の科学、すなわち言語学は、言語自体を対象として扱うのであり、人間的実存の機能としての言語は、その対象とならない。それに反し、語る人間にとって、言語は対象・目的でなく、手段である。語る人間は言語によって自己を表現し、事物を表現するのである。そこで、言語にかかわる、幅広い領域と問題については、言語学的アプローチのほか、それによっては解明しえない、というより、それ固有の領域でないところについて、哲学的アプローチによる解明が必要とされる。すなわち、「言語の科学」と区別される、「言語の哲学」が構想されねばならない。言語哲学として、論理実証主義や分析哲学などの立場があろうが、本論が主として対象とするのは、言語についての現象学的考察である。「言語の現象学」というまでもなく、言語の科学とまったく切り離された地点で成立するものではない。言語の科学が客観的な分析をめざすのに対し、言語の現象学は語る主体を中心にその総合を求める。メルロー＝ポンティは1951年の第1回国際現象学会における、『言語の現象学について』と題する報告の中で次のように述べている。

「言語の客観的科学とならんで、バロールの現象学を区別した時点から、われわれはこの2つの学が交渉しあう弁証法の道を踏みだしたのである。」<sup>(2)</sup>

メルロー＝ポンティはここですで、フッサールの現象学における言語論から問題を提起し、ソシュールらの言語学的概念を現象学的に考察し、最後にその哲学的帰結を求めている。注目すべきは、メルロー＝ポンティがこの報告の冒頭で、言語の問題に中心的な位置を与えていることである。

「まさに言語の問題は哲学の伝統においては第1の哲学に属していないゆえに、フッサ

ールはその問題に、知覚や認識の問題よりもずっと自由にとりくんでいる。かれは言語問題を中心的な位置におしすめ、かれがそれについて語ったわずかな言葉は、独創的で謎にみちている。この問題はしたがって、他の問題よりも、現象学に問いかけて、ただフッサールをくりかえすだけでなく、かれの努力をもう一度やりなおし、かれの主張よりも、かれの反省の動きを再開することを可能にしてくれる。」<sup>(3)</sup>

だがこのようにフッサールの企図の継承と新たな展開をめざしたメルロー＝ポンティの言語の現象学は、重要な問題提起を含みながらも、十分な展開をみないでしまったといわざるをえない。しかしフランスにおいて、メルロー＝ポンティの努力を再びやりなおし、かれの反省の動きを再開しようと企てているのは、ボール・リクールである。リクールは第1回国際現象学会で、メルロー＝ポンティと並んで、報告者の1人であったが、かれは上記のメルロー＝ポンティのことばを好んで引用し、「フランスの偉大な現象学者メルロー＝ポンティ」とかれ自身の関係を、フッサールとメルロー＝ポンティの関係になぞらえている。<sup>(4)</sup> 事実、現在フランスで現象学的観点からの言語についての論攷を精力的に発表しているのはボール・リクールである。リクールはさまざまな構造主義が根拠としている「記号論的モデル」を、主体の哲学に対する挑戦として受けとめ、それとの対決と批判とを通して、かれ自身の観点をあきらかにしようとしている。本論はその過程を、かれの主要な論文を通して辿ってみたい。

リクールはフッサールの現象学の紹介者として、その精密な注解者として知られているが、他方かれは、現象学的方法に基づく、「意志の哲学」の体系の完成をめざしている。

現在、かれの哲学的探求は挙げて解釈学の問題に集中し、すべてが解釈学的相のもとにみられているという過言ではない。かれの企図は、かれ自身が『実存と解釈学』で明言しているように、「<sup>(5)</sup>解釈学の問題を現象学的方法に接木すること」にある。したがって、リクールの究極の企図は、狭義の言語の現象学を完成することではなく、かれにあって言語の現象学的考察は解釈学の問題を解明するための一過程である、とまずいっておく必要があろう。

さてリクールは、メルロー＝ポンティの企てをどのようにやり直そうとするのであろうか。リクールが評価するのは、メルロー＝ポンティがフッサールとともに、言語を現象学の中心的位置においたことである。リクールは現象学が次の3つのテーゼをたがいに切り離せないものとして含んでいるとする。すなわち、第1に意味（signification）は現象学的記述のもっとも包括的なカテゴリーであること。第2に主体は意味の担い手であること。第3に還元は、意味に対する存在の誕生を可能ならしめる哲学的行為であること。<sup>(6)</sup>これによって言語と現象学の関係が規定される。いっさいの存在は、体験の意味として思念されるがゆえに、すべては意味作用なのである。

「このようにして、現象学というものを、<sup>(7)</sup>普遍化された言語の理論として提示することができる。」

現象学のみが意味の空間を、したがって言語の空間を開く、とさえいえることができる。この意味において、言語を中心的位置においたメルロー＝ポンティの態度は評価されねばならない。

しかしながら、かれの現象学は、言語の問題を、近代の言語学や言語学的モデルにならって構成された記号論的学問との対話を許さないほどに急進化させてしまった。メルロー

＝ポンティにとって重要なのは、言語学者との対話でなく、哲学的帰結のほうであった。リクールは、メルロー＝ポンティの言語哲学が「半ば挫折した」のは、この点に原因があると考ええる。なぜならこのパロールと語る主体の現象学は、構造主義が故意に避けた、あるいは解決しなかった問題を留保してしまったからである。その問題とは、語る主体を欠いている、記号の自律的な体系が、どのようにして活動に、パロールの行為に入るのか、ということである。

ここにおいて、言語の現象学確立のためのリクールの課題が明瞭になる。まず第1に言語学との、構造主義との対話である。それを通して、言語の科学と言語の哲学との対立点をあきらかにすることである。哲学の任務は、言語学の陥った二律背反を克服することである。構造主義言語学はラングとパロールを区別し、対立させたが、言語の哲学にとって必要なのは、両者の対立よりも関連であり、統合である。そして事実、リクールは構造主義との対決を通じて、問題点を明確にし、今や自己の立場を確立しつつあるのである。構造主義言語学を論じたリクールの主要な論文としては、論文集『解釈の葛藤』（1969）に「解釈学と構造主義」という表題で収められた3つの論文、『構造と解釈学』（1963）、『構造・語・出来事』（1967）、『解釈学の問題、および意味論的問題としての二重の意義の問題』（1969）、それに「解釈学と現象学」として分類されている、『主体の問題——記号論の挑戦』（1968）が挙げられる。とりわけはじめての2論文は「エスプリ」誌の構造主義特集に掲載されて反響を呼んだものである。言語と解釈学の問題を論じたものとして、本論でとくに参照するのは、次の2論文である。『言語についての反省が、ことばの神学に寄与するもの』（1968）および『ディスクールにお

ける出来事と意義』(1970)。

まず構造主義言語学が前提としているものを分析し、それから構造主義言語学の本質的特徴を抽出しなければならない。

イエルムスレウは、ソシュール言語学の基本的前提を次の5つにまとめている。(L. Hjelmslev: Prolegomena to a Theory of Language, 1943)

第1に、潜在的な言語体系であるラング (langue) と、その個人的な行使としての言語行為であるパロール (parole) とを区別すること。

第2に、ラング自体の中に、体系の状態の科学である共時言語学と、変化についての科学である通時言語学とを区別すること。

第3に、体系の状態には絶対項はなく、相互依存の関係があるだけである。したがってソシュールのいうように、「言語は実体でなく形態」であり、「ラングの中にはただ差異しかない」のである。

第4に、記号の全体は、それを分析に付するためには、閉じた体系としてみなされねばならないこと。そこでイエルムスレウは、構造を「内的依存の自律的実体」として定義する。

第5に、記号は同じレベルの他の記号との対立関係において規定されるだけでなく、それ自体において、純粋に内的で内在的な差異として規定されねばならない。その意味において、ソシュールは「意味するもの」(le signifiant) と「意味されるもの」(le signifié) を、同じくイエルムスレウは「表現」と「内容」とを区別した。

さて、ソシュール自身は「構造」という語を使わず、その代り「体系」という語を用いた。構造という語がはじめて現われるのは

1928年で、「体系の構造」というふうに使われた。しかし「構造的」という形容詞が用いられてから、構造は体系と同義語となった。そこで構造という観念は、共時態の観念 (ラングの状態の、歴史に対する優先)、有機体の観念 (諸部分の包括的な統一体としてのラング)、それに組合せの観念 (諸単位の秩序としてのラング) を同時に含んでいる。そこで構造的観点が全体的に対立するのは、生成的観点とである。リクールは「構造主義とはこれら一連の前提の中に含まれる要求を完全に意識することとして定義されう<sup>(8)</sup>」と述べている。とすれば、前記の基本的前提から、構造主義言語学のどのような方法論の特徴がひきだせるだろうか。リクールは次の3点を示す。

第1に、ラングとパロールの二分法の上に立って、ソシュールの言語学はラングの側を選びとる。その結果、記号の体系は語る主体から切り離され、自律的で、それ自体がいわばニュートラルでアノニムな現象を構成することになる。

第2に、構造主義言語学は畢竟するに、共時的観点をとる。体系の状態で言語は形成されるとする共時的観点に対し、言語の変化や変形を考察する通時的観点は従属的位置におかれる。つまり歴史的考察は体系的考察に比し、第2義的となる。

第3に、言語の実体的な相 (音韻論的実体と意味論的実体) を、言語の形態的相に還元すること。ソシュールは「ラングにおいては差異しかない」といった。構造とは関係のみを含む体系で、相互的依存関係のみを含む体系である。したがってラングの体系には外的関係はなく、純粋に内的、内在的な関係のみがある。辞書によって語の意味を調べようとすれば、語をもって語を

説明するために、ある語から他の語へと、無限に送りがえされてしまう。そこで記号は「記号の宇宙という囲い」(la clôture de l'univers des signes) <sup>(9)</sup>の中に閉ざされていることになる。

以上の構造主義的仮説は次のイエルムスレウのことはに要約することができよう。

「言語を、本質的に、内的依存の自律的な本質、要するに構造であるとして記述することとは、科学的に正当である。」<sup>(10)</sup>

こうして構造主義言語学は、ラングとパロールを峻別することによって、二律背反に陥り、ラングという、語る主体から独立した、純粋に内的な記号体系の中に閉じこめることになる。それに対して、言語の哲学は、その二律背反を克服すること、すなわちラングとパロールの関係を重視し、潜在的で抽象的な体系であるラングから、個人の具体的な言語行為であるパロールへの移行はどのようなされるかの解明を課題とする。構造主義言語学によって排除されるもの、それは個人的な言語行為の外的実践としての語る行為であり、また、ラングの自由な組合せ、新たな陳述の産出としての語る行為である。フンボルトは、「言語は産出された死せるもの (ein todes Erzeugtes) としてよりは、むしろはるかに産出 (eine Erzeugung) <sup>(11)</sup>とみなされねばならない」とした。ここでいう産出とは、単にある体系から他の体系への移行と変化という通時態を指すだけでなく、各人における、すべての人における言語行為の作品の深層におけるダイナミックな生成を意味する。言語の現象学は、この生成的観点に立たねばならない。

さらに、構造主義言語学から排除されるものは、「何かについて、何かを言う」(dire quelque chose sur quelque chose) という言語の第1の意図である。話し手と聞き手は、

この意図を直ちに理解する。話し手と聞き手の両方にとって、言語は何かを思念する。もっと厳密に言えば、言語は二重の思念 (Visée) をもつ。1つは理念的な思念 (何かを言う) であり、もう1つは現実的指示 (何かにについて) である。この二重の動きにおいて、言語は2つの閾を越える。すなわち、意義の理念性 (idéauté) の閾と、指示 (référence) の閾である。この二重の閾を通しての超越の動きによって、言語は意味する (vouloir dire = 言わんとする) のである。そこにおいて、言語は現実に対して力を及ぼし、また思想に対して現実が及ぼす力を表現する。この2つは、メイエがいうところの、言語の内在性と超越性とに相当し、また現代風に言い表わせれば、内在的構造と明示の平面である。明示の平面では、意義 (sens) の効果は現実の激しい攻撃に曝される。そこでは、もはや記号の宇宙にとどまっていることはできない。「それゆえ記号の宇宙の囲いという公理を、『言う』という言語の第1の機能に注意をむけることによって均衡させねばならない。記号の宇宙の囲いとは対照的に、この機能はその囲い <sup>(12)</sup>を開示することにある」とリクールはいう。

ハイデッガーはその『存在と時間』の第34節において、「語ること」(Rede) をかれの言語考察の中心的視点とした。リクールの言語論にハイデッガーの影響ははっきりとうかがえる。

「語るわれわれにとって、言語は対象でなく媒体である。言語はそれを通して、それを手段として、われわれがわれわれ自身を表現し、われわれが事物を表現するものである。語ること、それは語り手が、何かについて何かを言うという意図において、記号の宇宙という囲いをのりこえようとする行為である。語ることは、記号としての言語が、その指示物、その対向するものにむかって自己超越し

ていく行為である。言語は消え去ることを願う。言語は対象として死ぬことを願う。<sup>(13)</sup>」

言語はそれ自体が対象でなく、媒体であるということは、次の3つを含意する。第1に意味作用、つまり指示すること（何かについて何かをいうこと）、第2に伝達、第3に表現である。この3つは、言語学には還元しえない、言語哲学の問題である。そして言語の現象学がこの問題にとりくむとき、伝達と表現よりも、意味作用の問題に、哲学的優先権を与える。意味作用とは、現実を記号によって表象し、記号を、現実を表象するものとして理解する能力を意味する。

そこで、現象学的分析の枢要な概念である、志向性の概念は、この問題の解決に大いに有効であろう。なぜなら、記号は意識が何かに向かっていく思念として構成されていることを前提としているからである。この思念において、前述のように、2つの契機、すなわち言語の「理念性」と「現実性」との2つを区別することができる。意義は世界の中にも、意識の中にも存在せず、また、いかなる物理的、心的現実性ももたない。それに対し、語ることは、何かについて語ることであり、そこにおいて現実を指示する。それが「現実性」の契機である。あらゆるパロールは、理念的意義の関と現実的指示の関という2つの関をもち、そしてパロールの志向性は、この2つの関の志向性である。ラングに対するパロールの特質は、「何か」を言うことと、何か「について」言うことの分節化に存する。つまり潜在的な言語体系としてのラングは無言であり、何も言わない。それは記号の体系であり、いつでも使用可能な道具である。それに比し、パロールは語る。パロールは何かについて何かを言うのである。

言語の現象学はそこで、ラングからパロールへの移行を可能にする、新しい言語学的単

位についての考察に進まねばならない。その単位とは、音素的単位にも、語彙的単位にも還元できないものでなければならない。そしてその新しい言語学的単位こそ文（phrase）である。文こそはパロールの動因である。ラングは存続し、保持されるのに対し、文は生まれ、そして死ぬ。だれかが話すたびに、記号の一時的、一回的な組合せが形成される。この一時的、一回的な組合せが言語の出来事である。そこで文はディスクールの出来事（événement du discours）として定義される。

ディスクールは言説、言辞、論述などの訳語が与えられているが、一連の語や命題によって思想を表現し、展開させるものである。言語学的には、言表やメッセージの総体を指し、ラング、体系、コードと対立する概念である。Événement の訳語としての「出来事」は熟さぬ表現であるが、一般に人類または個人にとって、注目すべき重要な事件、事象を意味し、宗教的には、奇蹟と同義に用いられる。言語学的には、ラングがパロールとして実現される行為面を意味する。ディスクールの出来事という概念は、次のリクールの定義が、明瞭に説明してくれよう。

「いかなるディスクールも出来事として実現される——しかしいかなるディスクールも<sup>(14)</sup>意義として理解される。」

したがって出来事は構造と対立する。パロールの行為をラングにおいて起こすには、体系を行為として、構造を出来事として生起させなければならない。ここに言語の現象学の解明すべき課題がある。

「問題は具体的な記述によって、記号の体系であるラングから、ディスクールの出来事であるパロールへの移行を立証することである。」<sup>(15)</sup>

## 2. ディスクールの出来事

ラングとパロールの二律背反を克服しようとして一般に陥りやすい誤りは、ラングの科学とパロールの現象学を対立させて、一種の心理学主義に再びはまりこむことである。それにはまず言語の水準の階層を理解することである。すなわち、音韻論的、語彙論的、統辞論的単位の階層ではない、別の階層を考えねばならない。リクールはバンヴェニストに従って、ディスクールをとりあげる。意味作用の現象学が扱べき新しい言語学的単位はラングの単位でなく、パロールの、ディスクールの単位であり、この単位は文または言表である。この新しい単位は記号論的ではなく、本来的に意味論的である。なぜなら、それはまさに「意味する」ものだからである。

ここで記号論的観点と峻別するべき意味論的観点を強調しなければならない。記号を差異として記号に対立させるのが記号論的機能であり、記号によって現実を表象するのが意味論的機能であり、前者は後者に従属している。バンヴェニストはこの表象能力を重視する。言語は人間の「象徴する」能力の中で最高の能力を表わしている。それは「記号」によって現実を表象し、現実を表象するものとして記号を理解する能力<sup>(16)</sup>である。すなわち、意味論的機能は、一般的に「意味する」というだけでなく、「何かを言うこと」「表象すること」「記号を事象に送りかえすこと」である。

ラングからパロールへ、コードからメッセージへ、構造から出来事への実現を可能にするのは、バンヴェニストのいわゆる「ディスクールの審級」(instance du discours)である。それはかれによれば、「語り手によってラングがパロールに現実化されるための、不

連続で、その都度独自の行為<sup>(17)</sup>」である。

リクールはこのディスクールの特性として、出来事、選択、更新、指示、語りかけ、の5つを挙げる<sup>(18)</sup>。

1. ディスクールの現前する機能は行為であり、行為としてのディスクールは、出来事という本性に属する。体系は潜在的であるゆえに無時間的であるのに対し、語ることは実際の出来事であり、一過的行為、消滅である。

2. ディスクールは一連の「選択」から成る。選択とは、ある意味が選びとられ、他の意味が排除される、ということである。選択は、体系の対応する強制の相対物である。

3. この選択は「新たな」組合せを産出する。新たな文を発表しその文を理解すること、これが語る行為とパロールを理解することの本質である。潜在的には無限にある、この新しい文の産出は、記号の有限で閉じた目録とは対立する。

4. 言語が現実を指示するのは、ディスクールの審級においてである。語ることは、「何かについて何かを言うこと」であるが、この点について、フレーゲやフッサールの考えが参照される。フレーゲは Sinn と Bedeutung とを区別し、それによって、言語が理念性と指示の二重の思念をもつことを示した。意義は、純粹の思考対象として非存在のものであるなら、語や文を現実の中に根づかせるのは Bedeutung——指示または関係づけである。フレーゲはそれを、「われわれを関係づけのほうに導くものは、真理の要求である」(Über Sinn und Bedeutung.)と述べている。つまり言語の理念的な意義が、現実的指示へと前進することである。

他方フッサールは *Bedeutung* と *Erfüllung* とを区別した。かれは『論理学研究』の中で、理念的な意義は空虚であり、不在であって、充たされることを求めており、その意義充実 (*Erfüllung*) によって、言語はそれ自身に帰る、と述べている。

フレーゲにせよ、フッサールにせよ、こうして分節化したものは、記号の囲いを破り、記号を別の記号に開示する、つまり言語を言うこととして構成する、意味作用的意図である。意義の理念性から事象の現実性へと交換をおこなう契機は、記号の超越性の契機である。この契機は文と同時にあって、言語が何かを言うのは、文の平面であって、それ以下ではない。

5. 以上の、出来事、選択、更新、指示は、ディスクール<sup>(18)</sup>の主体を指定する固有の仕方を含意する。誰かが誰かに語る、ここに伝達行為の要点がある。これによって、パロールの行為は体系の無名性に対立する。またこれによってパロールの行為の主観性は、一挙に「語りかけの相互主観性」となる。言語が現実指示と主体を、世界と聞き手をもつのは、同じ水準で、同じディスクールの審級においてなのである。換言すれば、ディスクールのみが世界をもち、語りかけられる「他者」、すなわち対話者をもつのである。

こうして、はじめは二元的に対立させた、体系的と歴史的、構造と出来事、選択と強制、更新と制度化などを、次には総合させねばならない。それはディスクールによって、構造でも出来事でもなく、一方を他方にたえず换位している言語現象を支配することができるような、思考の道具をみつけだすことである。この問題は統辞論として、意味論としての言語に関係する。そのためにリクールは、チヨ

ムスキーの「生成文法」と、ギョームの「ディスクールの形態論」という新しい言語学的理論を参照し、援用するのである。

チヨムスキーの学派はブルームフィールド派のアメリカ構造主義者たちの、資料の収集、配列、分類に終始する経験主義的研究方法に背をむけ、一挙に文の単位から、新たな文の産出という問題から出発する。チヨムスキーはフンボルトと同じく、人間の言語の創造的な面、有限な単位の組合せによって無限に事象を表現する産出面を重視する。真の言語学が対象とすべきは、言語創造そのもののメカニズムでなくてはならない。

チヨムスキーの生成文法が対立するのは、第1次構造主義者たちの、既成の要素の分類学で、かれは文生成のダイナミックな構造を探究する。リクールがチヨムスキーに注目するのはその点においてである。

「私の考えでは、第1次構造主義を論破するものは、規則づけられた力動性としての、この新しい構造の概念であろう。この構造概念は第1次構造主義を統合することによって、つまりそれを正確に有効性の水準<sup>(19)</sup>に位置づけることによって、論破するであろう。」

リクールはさらに、「不当に知られていない」フランスの言語学者ギュスターヴ・ギョームの理論をとりあげる。かれの形態論<sup>ディスクール</sup>的体系の理論、すなわち品詞の形態論は、やはり一種の生成文法なのである。

リクールがギョームの理論を援用するのは、それが一般に広まっている先入主を打破してくれるからである。その先入主とは、われわれは構文というものを、言語のもっとも内面的形式として、言語の自己充足を成就するものとして、とかく考えがちなことである。しかしこれははなはだしい誤りである。構文はラングの分裂を保証してくれない。そのことはすでに、分類学的な閉じた体系の中で、記

号の構成がおこなっている。

「構文は、それがラングでなくディスクールのに属しているがゆえに、記号から現実にもどる途中にいたのである。それだからこそ、名詞や動詞などの品詞<sup>ディスクール</sup>の形態は、現実をその空間的、時間的相のもとに把握しようとする言語の作業をあらわしている。その作業をギュスターヴ・ギョームは“記号を宇宙に戻す”<sup>(20)</sup>と呼んでいる。」

記号とは現実に不在のもの、事物以外のものとするだけでは不十分なのであって、記号とは表現し、理解し、把握するために、そして最終的には示し、見させるために、みづから適用されることを望むものである。ディスクールとは、われわれの経験の思考可能で、ことばに表わしうるものを完全に表現するために、たえず更新されている試みであるとして、ディスクールの可能性の条件をみたとすことが、言語の哲学にとって必要なのである。

リクールがチョムスキーやギョームの新しい言語学理論に期待するのは、それがラングとパロールの二律背反に立脚している第1次構造主義を克服してくれることである。それは「構造化された分類目録」ではない、「構造化する操作」という力動的概念によって、構造と出来事、規則と創造、強制と選択などの間に、新しい関連、非二律背反的な性格を確立しつつあるからである。

### 3. ディスクールと解釈

言語の現象学は、リクールの場合、解釈学に結びつかねばならない。リクールはこの問題を、ミシェル・フィリベール著『リクール』に寄せた論文『ディスクールにおける出来事と意義』の中で、精細に展開している。解釈学が対象とするのは、エクリチュールというより、書かれたディスクールであり、真の解

釈学はディスクールにおける出来事と意義との弁証法に基づかねばならないとするのである。

記号の宇宙の囲いをのりこえるのは、パロールの出来事である。それによってラングからパロールへの移行がなされる。その移行を解明するのは、ラングの言語学にかわる、文の言語学でなければならない。リクールはまず、パロールの出来事の理論としての「文の言語学」<sup>(21)</sup>の特質として次の4点を挙げる。

1. ラングの体系が出来事となるのはディスクールによってである。ラングの体系は潜在的で無時間的であるのに対し、ディスクールは顕在的で時間的で、その度ごとに実現さる。

2. ラングは主体を欠くのにに対し、ディスクールは人称のような複雑な指示語の働きによって、ディスクールの語り手に送りかえされる。

3. ラングにおいては、記号は同一体系内の他の記号にしか送りかえされないのに対し、ディスクールは常に何かについて述べる。ディスクールはそれが記述し、表現し、表象しようとする世界を指示する。ここに言語の象徴機能がある。

4. ラングはコミュニケーションの条件で、コードを供給するだけであるが、メッセージが交換されるのはディスクールにおいてである。その意味で、ディスクールのみが世界をもち、対話者をもつ。

以上の特質がパロールを出来事において構成する。これが、語る場合にディスクールとして実現されるのである。次に立場をかえて、発言されたディスクールは、聞き手にどのように理解されるだろうか。すでに述べたように、「いかなるディスクールも出来事として

実現されるが、いかなるディスクールも<sup>サシス</sup>意義として理解されるのである。」

バロールの言語学において、出来事と意義とが分節化される。この分節にこそ、解釈学のかなめがある。すなわち、ラングがディスクールとして実現することによって、バロールの出来事へ超越すれば、それと同じだけ、バロールは理解の過程に入ることによって、意義へ超越する。この出来事の意義への超越が、バロールの本性であり、この超越は言語の志向性、言語におけるノエマとノエシスの関係を証明している。言語が意味すること (meinen, vouloir dire) であるのは、この止揚 (Aufhebung) によってである。この止揚によって、出来事は意義の思念の中に超越され、そこに保持されるのである。

この、出来事の意義への止揚を明示するために、ディススクールが実現する2つの様態である、話しことばと書きことば＝エクリチュールとについて検証してみよう。ここでいうエクリチュールとは、デリダのようにバロールと峻別したものでなく、話しことばでは潜在して、まさに生起する状態にあったものが、明瞭に顕示されたものを指す。その潜在状態にあったものとは、「出来事からの意義の分離」である。

バロールからエクリチュールへの動きによって、出来事の意義への超越が認可される。解釈学は、この認可された超越から生じる。エクリチュールによって固定された生は、もはや偶有事でなく、出来事の意義への止揚が十分に達成したものである。

バロールからエクリチュールへ、出来事から意義への止揚を理解するために、先に挙げたディススクールの4つの特質をこれに適用し<sup>(22)</sup>てみよう。

#### 1. 第1の特質は、話しことばとエクリ

チュールとは異なった仕方では実現される。話しことばでは、バロールは瞬時にして消え去り、出来事は生起し、消える。そこで消滅するものを固定する、書きつける、という問題が出てくる。ラングの無時間的体系は、現われも消えもしない。消え、固定すべきはディススクールである。ここでプラトンの『パイドロス篇』の神話を喚起すれば、「エクリチュールは“ディススクールの弱点”を“救う”ために、人間に与えられたもの」である。

実際にエクリチュールが固定するのは、「言う」という出来事でなく、言うことの「言われたもの」(le «dit» du dire) である。これはディススクールの思念を構成する志向的外面化であり、これによって言うこと (sagen) が陳述 (Aus-sage) になろうとする。要するに、書くもの、書きつけるものは、言うことのノエマであり、それはバロールの出来事の意義である。

こうしてバロールからエクリチュールへの移行において、言うことが言われたものへ上昇するのである。

2. 文はいろいろな仕方では語り手を示す。話されたディススクールにおいては、ディススクールと語る主体との関係づけは、直接的になされる。すなわち語る主体とディススクールの意義は重なりあうので、語り手の意味すること (言わんとすること) と、ディススクールの意味することを理解するのは、同じことである。フランス語に即していえば、表現の両義性がこの重複を説明してくれる。すなわち、意味することは、言わんとすること (vouloir dire) である。

書かれたディススクールにおいて、筆者の意図とテキストの意義とは合致しなくなる。ことばの意味と心的意図との分離は、ディススクールの記述の真の賭である。語り手と

ディスクールの関係が断たれたのではなく、それがゆるみ、複雑になったのである。テキストの意味することは、筆者が意味しようとしたことよりも重要である。書かれたディスクールは、話しことばの場合のような、身ぶりや抑揚によっては「救われな<sup>い</sup>」。意義のみが意義に「救いをもたらす」ことができる。ということは、解釈のみが、筆者の「救い」えないディスクールの「弱さ」の治療薬となるのである。

3. ディスクールは世界を指示する。話されるディスクールでは、それが指示するのは対話者に共通な「状況」(situation)であり、それは動作で示され、指示はいわば「公然」である。書かれたディスクールにおいて、テキストはもはや指示をもたないだろうか。指示のない絶対的なテキストというのは、一種のイデオロギーにほかならない。ディスクールは何かについて述べざるをえない。指示がないとするのは、状況と世界とを混同しているからである。人は状況のみならず、世界をもっている。テキストの指示は、対話における、「公然たる」指示の「環境」(Umwelt)ではなく、われわれが読み、理解し、愛するであろうテキストの、非公然たる指示によって企投された「世界」(Welt)である。テキストを理解するとは、われわれの状況を爆破すること、われわれの Umwelt を Welt たらしめるあらゆる意味を、われわれの状況の資概念の中に内挿することである。

ハイデッガーがその『存在と時間』の中の「了解」の分析において語るように、人がディスクールにおいてまず了解するのは、他者ではなく、新しい世界内存在の企投である。エクリチュールのみが、その筆者からだけでなく、対話的状況の狭さからも超えて、世界を企投するディスクールの目

的を示現する。

4. 第4の特質において、ディスクールのエクリチュールの成就がもっとも模範的におこなわれる。ラングは誰にも話しかけず、ディスクールのみが、誰かに語りかける。しかしディスクールが状況に現前している話し相手に語りかけられるのと、読める者には誰にでも語りかけられるのとでは異なっている。書かれたものは、第2人称の汝に語りかけられず、それがそれ自身でつくりだす聴衆にむかって語られる。そこで、書く＝読むの関係は、話す＝聞くの関係の、特殊ケースではなくなった。同時に、ディスクールは、その語りかけの普遍性におけるディスクールとして示現される。ディスクールは出来事としての偶然性、筆者の経験の限界、状況の狭さから脱け出し、目に見えない、未知の聴衆を相手に語りかける。

こうして、最初に挙げた4つの仕方によって、ディスクールは出来事として生成し、次に挙げた4つの仕方では、出来事は意義のほうに超越していく。ここに解釈学の過程がはじまる。すなわち読む者において意義はどのように実現するかという問題である。読者において意義は新しいディスクールの出来事に超越するのであり、これが解釈そのものである。解釈するとは、テキストを再びパロールに導くことである。それは新しいディスクールの行為を産出することである。この点でシュライエルマッハーやディルタイの、筆者との対話関係において生の表現を「筆者が自己理解している以上に筆者を理解する」というロマンティックで心理主義的な解釈学は批判されねばならない。なぜなら、解釈におけるディスクールの新たな行為は、ディスクールの最初の行為と同一であるとは、まったく主張で

きないからである。

ここで三たび、読書の際の読者における意義の実現について、前記の4つの特質について検討<sup>(23)</sup>してみよう。

1. 読書において直面するのは、語るテキストでなく、沈黙のテキストである。テキストをパロールに導くとは、「傾聴する」ことではない。パロールに導くとは、オーケストラの指揮者が楽譜の指示に従うように、テキストの命令についていくことである。また、曲の譜面と、演奏者の演奏との間には独自のカップルが形成されるように、読むことにおける意義の理解は、新しい出来事において出来事をくりかえしているのではなく、テキストから出来事を産出しているのである。

2. テキストを理解するとは、けっして筆者の意図に迫りつくことではない。「他者が自己理解している以上に、他者を理解する」というロマンティックな解釈学のスローガンは、まったくの迷妄にすぎない。逆に、意義と意図の乖離が独自の状況をつくりだす。われわれは筆者の意図という「救い」を失った——もっともそれは大抵の場合未知のものであるが。理解することは、テキストが筆者の心的な意図から分裂して切りとった、非心理的で、純粹に意味論的な空間を動くことである。この意義の空間において、理解は意義の仮説を構築しなければならないのである。

3. テキスト理解の指示するものについても同様のことがいえる。テキストの意義はテキストの背後に、その筆者の推定される意図の方にあるのではなく、テキストの前に、公然的でないその指示の方に、テキストが開示する世界の方にあるのである。理解するとは、原初のディスクール<sup>(24)</sup>の状況

においてではなく、理解することは、読者の状況も、筆者の状況も破裂する世界を狙いめざすことである。

4. テキストは読める者すべてに対して開かれている以上、解釈学の務めは、テキストが最初に宛てられた者が理解しえたことによって規制されるというのは、絶対に誤りである。パウロの書簡はローマ人やガラテヤ人などに宛てられたと同様、私にも宛てられているのだ。真の意味の対話だけが「汝」をもつのであって、書かれたテキストは、それを読むことのできる人すべてのためのものである。そこで意義の全時性(omnitemporalité)は、読み方の歴史性に対応する。テキストはその筆者や、その状況や、その最初の宛先人から免れ、常に新しい読み手を獲得できるからである。この点で、エクリチュールは2つのパロールの出来事<sup>(25)</sup>の間の、模範的な媒体である。最初のパロールの出来事は、出来事を意義に止揚することによってのみ、新しいパロールの出来事を生じさせる。この文字で書かれた「言われたもの」の普遍性が、新たなディスクールの出来事<sup>(26)</sup>を出現させうるのである。

解釈するとは、新たなディスクールの出来事への意義の超越であるとする、リクールの立論から、私たちはいくつかの重要な帰結をひきだすことができようが、ここでは次の1点だけにとどめておく。

前述のようにディルタイ流の解釈学は、パロールの出来事というカテゴリーを解釈において特権化し、我と汝の対話関係を理解の一切の状況における範型としてきた。そこでテキストを理解することも、対話的状況の一特殊ケースにすぎなくなってしまう。この解釈学的考え方は、いわゆる「神のことばの神学」を養ってきた。この神学にとって、出来事と

はすぐれて、ことばの出来事、すなわち福音の宣教である。この原初の出来事の意義は、この神学によれば、現在のわれわれが信仰の決断によって直接に自分自身に適用する現在の出来事によって証明されるとする。

このような対話的關係の類推によってテキストを実存的に理解できるとするのは、誤れるスローガンにすぎないことは、すでに述べたとおりである。しかるに、聖書のみを信仰の拠りどころとする信徒にとって、聖書(Ecriture Sainte)はまさにエクリチュールにはかならない。そこで「神のことばの神学」は解釈学上の大きな問題に逢着せざるをえない。この難点を克服するには、まず解釈することを理解することに従属させるのではなく、両者を連鎖する2面として統合せねばならない。リクールは次のように述べている。

「出来事よりも意義を特権化する解釈学においては、解釈することは、対話の相互主観的な状況でおこなわれているような『理解すること』の1特殊ケースではなくなる。エクリチュールは生の表現を固定するだけでは限定されず、それは出来事と意義との弁証法<sup>(24)</sup>の真の啓示者となる。」

リクールのこの最近の論文によって、言語の現象学的考察と解明が、他の言語の科学の成果をとり入れつつ、今や解釈学の新たな地平を開きつつあることを、私たちはたしかに見てとることができるのである。

## 注

(1) Louis Lavelle の言語論については、拙論『バロールの倫理のために』「一橋論叢」1970年第4号を参照されたい。

(2) Maurice Merleau-Ponty: *Sur la phénoménologie du langage*, in 《Signes》, N. R. F., 1960, p. 108.

(3) Ibid., p. 105.

(4) cf. Paul Ricœur: *La question du sujet: le défi de la sémiologie*, in 《Le conflit des interprétations》, Seuil, 1969, p. 243.

(5) P. Ricœur: *Existence et herméneutique*, in op. cit., p. 7.

(6) P. Ricœur: *La question du sujet: le défi de la sémiologie*, in op. cit., p. 242.

(7) Ibid., p. 243.

(8) P. Ricœur: *La structure, le mot, l'événement*, in op. cit., p. 83.

(9) P. Ricœur: *Contribution d'une réflexion sur le langage à une théologie de la parole*, in 《Exégèse et herméneutique》, Seuil, 1971, pp. 305—307.

(10) L. Hjelmslev: *Essais linguistiques*, TCLC. XII, 1959, p. 21.

(11) W. von Humboldt: *Werke VII*, 44.

(12) P. Ricœur: *La structure, le mot, l'événement*, p. 85.

(13) Ibid. p. 85.

(14) P. Ricœur: *Événement et sens dans le discours*, in Michel Phyllibert: Ricœur, Seghers, 1971, p. 179.

(15) P. Ricœur: *Contribution d'une réflexion...*, p. 312.

(16) Emile Benveniste: *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966, p. 26

(17) Ibid., p. 251.

(18) cf. P. Ricœur: *La structure...*, pp. 87—89

(19) Ibid., p. 90.

(20) Ibid., p. 91.

(21) cf. P. Ricœur, *Événement et sens dans le discours*, p. 178.

(22) Ibid., pp. 180—183.

(23) Ibid., pp. 184—186.

(24) Ibid. p. 186.